



ベトナム語と日本語を教え合った両国の生徒たち。お互いの言葉であいさつすると、一気に距離が縮まった

一緒にそば打ちに挑戦。みんなでつくったそばは「今までで一番おいしかった」



先生の協力隊経験で 世界が身近に

3月初旬の山形県米沢市。日本列島の南から春の訪れが聞こえる中、仙台から山形に向かう途中、車窓は突然、雪景色になった。

市街地から車で10分ほど走ると、趣深い洋風の門構えが見えた。国の重要文化財にも指定されているこの建物は、1901年に創立された九里学園高等学校。裁縫女学校、商業女学校、女子高等学校と変遷を遂げ、99年からは共学の普通校に。生徒それぞれが将来の目標に合わせて自由に学べる、多種多様なカリキュラムが人気だ。

そして近年では、米沢から、世界を思いやる心、をばくむべく「国際協力」にも力を入れている。



初めての書道で書いた文字は「友情」

浴衣を着て、日本の文化紹介をする九里学園の生徒たち。「外国の人に説明をすることで、自分たちの国のことを見直すきっかけにもなりました」



高校生の力で 米沢と世界をつなごう

人間は一人では生きていけない。山形県米沢市の九里学園高等学校では、ベトナムの高校生との交流などを通じて、世界に目を向け、共に学び、助け合う精神がはぐくまれていく。

「人種は違っても、ティリバンジャ（ザンビア語で、みんな家族）。ザンビアと日本はつながっているんだよ」と

九里学園における国際協力のキーパーソンの一人、1年7組担任の鈴木精先生は生徒たちによくザンビアの話をする。2007年から2年間、現職参加で青年海外協力隊として活動していた国だ。

「精先生から話を聞いて、アフリカが一人に身近になりました」と1年7組の童森まいさん。そんな彼女は、職員室の机にあった「子ども兵」の本を見て、気が身近になりました。本をめくると、そこには銃を持つて立つ一人の男の子の姿があったからだ。「こんなに小さな子が戦わなければならないなんて」。日本からは想像を超える現実。「もっと知りたい」。週一回ホームルームの「読書の時間」を活用して、クラスのみんなで本を読んで勉強した。そして昨年の文化祭では、クラスの出し物として、子ども兵についてのパネルやCMを作成。「自分たちが学んだことを、多くの人に伝えたい」と話す。

「途上国のことを、現実のものとして、生徒たちに受け止めてほしい」と鈴木先生。「貧困ってなに？」という生徒の疑問に答えるため、カンボジアで活動する認定NPO法人山形国際ボランティアセンター（IVY）のスタッフや国民総

幸福度※1世界第二位のブータンの協力隊OBを呼んで、途上国の「貧しさ」と「幸せ」についての授業を行った。さらに、JICA東北で開催されている「国際協力高校生実体験プログラム」にも積極的に生徒を参加させ、学校の枠を超えて地域の高校生と共に、国際協力について考える機会も大切にしていく。

ベトナムとの 高校生と出会う

そして、昨年から新たに取り組んでいるのが「21世紀東アジア青少年大交流計画」※2だ。人と人の交流を通じて、子どもたちに何かを感じ取ってほしい。鈴木先生はそんな願いで、ほかの先生たちと協力して参加を決定。7月には、初めてベトナムから20人の高校生を受け入れた。

もちろん、ほとんどの生徒はベトナムに行きたがる。それが、「どんな安と期待でいっばいだった。当日は、生徒会が中心となって企画した文化紹介やそば打ち体験で交流。夜は生徒たちの家庭にホームステイした。「日本に詳しくてびっくりしました。歴史とかアニメなんて、私たちが知らないこともたくさんあった」。最初は戸惑っていた両親たちも、いつしか家族のように仲良くなっていったという。

それから2週間後、今度は九



鈴木先生が 協力隊経験を 一冊の本に。



『ザンビアからの風』
（九里学園教育研究所）
1,500円（税込）

初めてのアフリカ。長年の夢だった青年海外協力隊に参加した鈴木先生が、ザンビアでの2年間の活動を綴った一冊。日本では信じられない文化や習慣、現地での葛藤、活動中のエピソードなどが盛りだくさん。この本を読めば、アフリカや途上国を身近に感じることができるだろう。

※1ブータンの国王が提唱した国民の精神的な幸福度を図る指標。一人当たり国民総所得（GNI）とともに、国の豊かさの指標として用いられる。

※2外務省が2007年から実施しているプログラム。ASEAN諸国、中国、韓国、インド、オーストラリア、ニュージーランドを中心に、毎年6,000人の青少年を日本に招致し、交流事業を実施していく。